泳げない俺が水遣い!?

栩朷 櫚欄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
泳げない俺が水遣い！？

【Ｎコード】
Ｎ９５６３Ｖ

【作者名】
栩朷　櫚欄

【あらすじ】
――――――俺は泳げないんだ……。夏になり、海やプールに行けば、必ずその台詞（セリフ）を言わなければならない。周りの、泳げる人たちの中で。少年はこの言葉を言うのが恥ずかしかった。嫌だった。……屈辱だった。だから願った……願ってしまった……家の裏から行ける、誰も知らない、ある場所で。――――――そう、願ってしまった（・・・・・・・）。それが、少年の運命を変えるとも知らずに。――――――これは、望まぬ能力のせい。水で遊（およ）げるようになったおかげで、様々なことに巻き込まれる。そんな、この世に１人の

水遣いの苦労話。

零話　遊（およ）ぐ、ちょっと前の話（前書き）

どーも、ヴォルティスです。

この小説では『栩朷　櫚欄　（クトウ　ロラン）』と名乗ることにしました。

それでは、（ある意味で）悲しい水遣いの零話をどうぞ。

零話　遊（およ）ぐ、ちょっと前の話

――7月下旬

全国的に麗しの夏休み様に入り、ハイテンションでハッチャける奴等も多いはずの今日この頃……。

俺こと瑞代浸（みずしろしん）は、人の、人による、人のための人為的貯水地。

英単語で、スペルはP，O，O，Lと書く、一般的には【プール】と呼び慕（した）われているであろう所に、何を血迷ったか、受験生の身分でいる。

すげぇテンションの低さで。

何故テンションが低いのか……。

それに対しては、こうお答えしよう。

『水は嫌いなんだ☆ミ　勉強もね♪』

別にふざけてはいない。本当に水遊びが嫌いだった。勉強もだが。

俺は昔から游ぐのが苦手だから。いや、だった（・・・）から、か。

俺は小さいころ、泳げないことを周りの人たちに言うのが恥ずか

しかった。非常に嫌だった。……屈辱だった。

だから俺は小４くらいのとき、お願いした。

小３のとき、探検ごっこをしていて偶然見つけた、俺だけしか知らない、秘密の場所。

家の裏の塀の、当時の俺がちょうど通れる穴を潜り、そこから細道を道なりに行き、突き当たりにある階段を登った所にある、古びた、小さな神社で。

《水（の中）で遊びたい》と。

今、時間を跳躍（ちょうやく）出来るのなら、当時の俺に「何故微妙に端折（はしょ）ったぁぁぁぁぁ！？」と殴りかかりに行くだろう。

勿論、その願いはその時は（・・・・）受理されなかったが。

まさか、こんな歳になった時に願いが叶うとは。

「ハァ～……」

ため息も出るわ……。

「ただ泳いでみたかっただけだったのに……」

ため息を吐きながらそう言う、俺の手の上には、テニスボール大の丸い球体になった水が浮かび、ピチャピチャと音をたてて回って

いた。

……改めて自己紹介しようか。

俺は瑞代浸（♂）１８歳。バリバリの受験生。

なんの因果か、能力を手に入れてしまった、ただの――――

――――水遣（つか）いだ

零話　遊（およ）ぐ、ちょっと前の話（後書き）

短いですが、零話ということで我慢してくれー！

なんか白銀と両立できる自信がなくなったＺＥ☆

ご意見要望ご感想、いつでもお待ちしてますよ～。

白銀のほうもよろしくね。

一話　能力（チカラ）（前書き）

目の疲れヤバし。

どーもクトウです。ロランでもええよ。

「白銀、光臨（あらわ）る」を更新しようと思ってたのに、何故かこっちを更新している私って……。

まぁいいや。白銀のほうもやるし。

つかやろうと思ってたのに寝落ちしました。

イイワケジャナイデスヨ？

それでは、主人公能力発現の回をどうぞ。

一話　能力（チカラ）

よお。瑞代だ。浸でもかまわんぞ。

今、俺は泳げないはずなのに、プールの目の前にいる。しかも1人で。

他に誰もいない。

この季節なら普通のプールは満員だろう。普通の、プールは。

しかしここは、ある機関の地下にある、特殊技能測定専用プールだからな。理由はわかる。

今から俺が能力を測定する（・・・・・・・）からだ。

ある機関とは、異能者育成学園のこと。

異能者の『異』と、育成の『成』を取って、《稲荷（いなり）学園》と呼ばれる所だ。

世間一般には、超難関の進学校として知られているが、異能者の育成機関だということは、関係者以外誰もいない。

そしてそれ（・・）を知られるわけにはいかないので、一般人は侵入出来ない仕様になっている。

もし仮に能力者ではない一般人が此処へ（進学と侵入、両方の意味で）入ろうとすると、即刻強制退場させられる。

進学で来たものは、他の学校に叩き込まれる。

無論、それを疑問に思わないように、記憶を改変されるが。

侵入者は、言わずもがな。

この世から（・・・・・）ご退場させられる。

閑話休題。

プールは一般的な２５メートルの大きさ。天井は高く、１０メートルはありそうだ。

地下ということで、周りは一面白い壁。無論、天井も白い。

しかし俺が立っている所から見て、左側にある壁は、全面ガラス張りになっていた。

そしてガラスの向こうでは、期待に満ちた目を向けてくる教職員

と、ここに俺を連れてきたお姉さん。その他、学園の生徒が多数いる。

「はぁ……。めんどくせ……」

▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△

さて、突然だが、君は水を操ることが出来るか？答えは否、だよな。

そりゃそうだ。

そんなファンタジーの塊みたいなこと、出来る奴はいない……と思う。

いるとすれば、頭がファンタジーな奴か……。

――――本当に能力者の奴か。

その二択しかないだろう。

前者は、まぁ俗に言う、《痛い奴》なんだろうけど。

では後者は？

言っとくが、俺はイカれてないからな。

その答えは、俺の手にある。つーか手の上に浮いてる。

そう、このキュルキュルと勢い良く回っている、水球だ。

何故こんなことが出来るようになってしまったのか……。

それはこの学園に来るまでの経緯も交えて話そう。

▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△

それは、春休みに入ったときだったか。

ようやく二年生という、微妙な学年が終わり、最上級生という、良い響きの学年になる一歩手前。

何故か俺は川に落ちた。それはもう見事に。

いや、『何故か』じゃないな。理由はわかってる……。

――――――バナナの、皮だ。

今まで、様々な人達（主に漫画の中の住人）が使用してきたであろう、由緒有（ゆいしょあ）るギャグ。

まさか現実の生活でこのギャグが発動するとは思ってもみなかった。不覚である。

閑話休題。

その時は、まさに一瞬だった。

俺は夕方、本屋へ行き、買った本を読みながら帰っていた。

本を読みながらも、しっかりと道を確認していたので、家への近道を行くため、人がほとんど通らないであろう、柵のない、少々危険な橋を渡って帰ろうと思った。

その橋がある川はわりと深く、昔一度溺れた記憶がある。中3くらいの時だが。

泳ぐのが苦手だったんだ、仕方なかろう。しかも深かったし。

まぁあんときは近くに人がいて、すぐ助けられたがな。

そんなことを考えていたら、近道の橋へ到着した。

しかし、二度とあんなヘマはしない、と颯爽（さっそう）と橋へ足を進めた。

――――――あの時ほど、近道の選択を悔やんだことはなかった。

俺は本を読みつつ、左右を確認し、しっかりと橋の真ん中を歩いていた。

しかし、道の先は、本があったため、何があるか確認しなかった。

そして、バナナの皮。

自分でも、見事な滑りを見せたと思う。

俺は滑った拍子に、読んでいた本と、小脇に挟んでいた長方形の財布を橋の上へ落とし、何故か俺本体だけ川へダイブ。

本と財布に殺意を抱いたのは初めてだった。

そしてバシャーンという音と共に川へ沈んでいく。

またかよ……。

そんなことを思いながら沈む。辺りに人の気配がなかったので、助けは来ないだろう。

くそっ……。

苛立ちを感じた。泳げないことに。

なにより、泳ごうとしない自分に。

水さえ……水さえなければ……。

そんな考えさえ出てくる始末。

自分に嫌気がさした。

そりゃ人間は水生生物じゃないんだから当たり前だ。

背中に何があたった。川底だろう。

そんなとき、頭の中に、小さいころ、ボロ神社でお願いしたことが浮かんだ。

懐かしいな……。

すると、急にさっきまで感じていた苦しさがなくなり、さっきまであった水圧が嘘のようになくなった。

なにが起きた……。

俺は、閉じていた目を、ゆっくり開けた。

信じられない光景を、目にした。

川が、俺を中心に半径三メートル程度の半球状の水の無い空間を作っていた。

俺は唖然とした。

物理法則を無視した光景に。

俺は、数分か、数秒かわからないが、一通り固まった後、力無く立ち上がり、水の壁に近づいた。

そして、若干震える手で、恐る恐る触れてみた。

すると、触れた部分を中心に、波紋が広がって行く。不思議な光景だった。

なんだ？重い気体の溜まり場？重力の反転？

次第に思考が冷静になり、色々と考えていたが、ふとあることが頭に思い浮かんだ。

――――神社でのお願い。

……いや、それは流石に無いだろう。

そう自分の意見を否定した。　自分が願ったこととは、食い違いがあったからだ。

俺が願ったのは『水で遊ぶ』こと。ようは水遊びがしたかった…

……ん？待てよ？

水で（・）遊ぶ？

思い至った考えに、冷や汗を流した。

もしや、水遊びじゃなくて、水で自分の思い通りに（・・・・・）弄べるして、願いが通ったのか？

待て待て待て。

だとすると、俺は水を自由自在に操れることになる。

しかし、これならば、説明がついた。先程、『水さえなければ』と思った。

言い換えれば『どっかいけ、この水ヤロー！』となる。本当にこうなるかは知らん。

しかし、現に水は俺の周りから退いていた。

――――――試してみよう。

そう思った俺は、早速水に命令を下してみた。

『廻(マワ)レ』

……。

何も、起こらなかった。

悲しさ１０％、恥ずかしさ９０％。

１人(もだ)悶えた。

そして考えた。

水を操れるなら、水の壁を動かすことだって容易じゃないのか？

ピクリともしなかったけど。

もしかしたら、質量がでかすぎたとか……。いや、それなら今、この空間は出来ていないな……。

てゆうかそもそも操れないとか……。

そんなことを考えつつ、願いを復唱してみた。

「『水で遊ぶ』……」

操る、じゃないもんな。上下関係というより、友達間隔に近いの

かも……。もしかすると、命令口調がいけなかったか。

もう一度。今度は別の方法で試した。

――――俺の手の上で水球になってくれ。

すると、回りの水壁（すいへき）から水が集まってきて、俺の手の上で球状になる。

マジで出来た……。

冗談半分で言ったことが出来たのに、何故か俺は冷静だった。

とりあえず、操れる……というか遊べることはわかったので、さっさと水中から脱出することに。

確かすぐ近くに川から上がれる階段があったはず。川の水が引いたとき、清掃を行うために川に降りる用の階段だ。

そう考え、願った。

――――階段まで、俺の通り道を作ってくれ。

すると、水は階段まで一直線に、アーチ状の通り道を作ってくれる。

水族館にある、下からも魚が見れる水槽の様な感じだ。

俺の場合は、天然物の水槽だがな。

変なことを考えつつ、余裕綽々で階段に向かう。なんか楽しい。

その後、無事川を脱出した俺は、早く濡れた服を替えるために、家へと急いだ。

翌日の早朝、俺は自身の能力を把握するために、近くの雑木林の奥にひっそりとある、小さな池に行った。

普段から人気が少ない所だが、早朝のため、誰もいなかった。

早速試してみよう。

そう思い、水を遊(あやつ)ろうとしたところで、声をかけられた。

そう、窓越しにガン見して来ているお姉さんだ。

あのお姉さんに、『こんなところは危ないから、場所を提供してあげる』と、そう言われ、来たのがこの学園だった。

色々と質問したいことが山ほどあったが、有り難く利用させていただくことに。

――――――結果。

『君、この学園に来ない？来ようよ！てゆーか来い！』

……今に至る。

半ば無理矢理転校させられ、稲荷学園にやってきた。

俺も、こんな能力（モノ）があるから、普通の生活は出来ないと思っていたので、良かったって言えば良かったんだけど。

親いないし、転校するのは楽だった。

……別に両親は死んでない。どちらも海外で働いていて、後数年は帰ってこない。

唯一気がかりなのは、残してきた幼なじみや親友達だけ。

まぁ同じ町内に住んでるんだから大丈夫か～、なんて思ってたら、思いっきり引っ越し。

荷物を持ち出して、学園の寮に叩き込まれた。

俺が驚愕している間に、すべて終わっていた。恐るべき手際の良さだった。

▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△

それから、編入手続きなど、色々あり、友達なども順調に増えつつ、今に至る。

月一である能力測定は、非常にめんどくさいの一言に限る。脈拍測定から始まり、運動技能測定、理論調査、能力実験、エトセトラ。

詳しいことは後ほど書くが、それはそれは細かい調査が行われて、非常にめんどくさい。

だが、これで能力の順位が決まるので、サボると後が恐い。色んな意味で。

まぁいいや……。

「さっさと終わらせて寝よ……」

俺は測定の開始を、教職員に促(うなが)す。

ちなみに、順位は、この学園全体（教職員含む）の人数で決められる。しかも、１００位以下は順位外、つまりは強さを同一視される。

なかなかシビアだ。

さらに、その順位の中で、１０位以内は能力の格が違う。

強さは、簡単に言うならば、１人１人で、軍の精鋭千人単位を撲滅出来るくらいだ。

１０位以下は精々軍の小隊と渡り合える程度。こう言ったら、１０位以内の奴の凄さがわかるだろう。

なにやら、俺が測定しようとしたら、窓の向こうの奴等がざわめき始めた。

まぁ仕方ねぇか。

新参だしな。色んな意味で……

――――それでは瑞代くん、測定を初めて下さい。

お姉さんの声だ。

さっさとやりますか。

――――暫定順位、１０位。瑞代浸。測定開始（スタート）。

そんな機械的な音が、スピーカーから流れた。

一話　能力（チカラ）（後書き）

なんか主人公をすごい順位にしてしまったｗｗｗ

考え無しに書いていってるから、後々めんどくさいことになりそう。

感想とか感想とか感想とかお待ちしてます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9563v/

泳げない俺が水遣い!?

2011年9月21日16時47分発行